幸福のエトセトラ

みみずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸福のエトセトラ

【Ｎコード】
Ｎ００６９Ｉ

【作者名】
みみずく

【あらすじ】
桃は六年来の恋に破れた女の子。失恋の傷も癒えぬまま、学生寮に住むことになった桃だけど・・・変人ぞろいの住人達と不器用な少女が織り成すほのぼのラブストーリー。

失恋よ、こんにちは

流れ落ちる白い滝を見ていた。

純白の滝を包み込むように抱きしめる腕を眺めながら、銀の大皿に乗ったケーキをたくさん食べた。

オペラ。

ブルーベリータルト。

ルージュ。

ミルフィーユ。

フレジエ。

ザッハトルテ。

モンブラン。

どれも甘くて、どれも美味しい。

贅沢なヤケ食いをした。

「よく食べるな。ダイエット中じゃなかったっけ。」

９個目のケーキを物色していた時、後ろから声を掛けられた。

顔を上げると、灰色のロングタキシードを着た光くんが、立っていた。

童顔なせいか、高校生にも間違えられる光くんだけど、今日は、一度も染めたことのない真っ黒な髪をすっきりと整えていて、なんだか大人っぽい。

だけど、大きな瞳は、茶目っけを含んでいた。

「おめでたい日は、特別なの。」

私は、澄まして答えてやった。

本当は、今日くらい、優しくしてあげようと思っていたけれど。

「先週、家族でお祝いした時も同じこと言ってなかったか？」

「気のせいじゃない。」

ふふんと笑ってやったのに、光くんは、嬉しそうな顔をした。

光君の隣で寄り添う新婦の明美さんも神々しいほどの笑顔を浮かべている。

真っ白なウエディングドレスは、極上シルクで仕立てたシンプルなタイプだけど、長身で細身の明美さんによく似合っていた。

「お料理楽しんでくれた？お友達のシェフに頼んだのよ。」

「はい。すごく美味しいです。」

「食べ過ぎて、腹こわすなよ。」

横やりを入れてくる光くんの脇腹を突いてやると、小憎たらしい新郎は、うっと唸った。

明美さんが、クスクス笑った。

鈴の音が鳴るような声が、かわいらしい。

「光くんは、果報者だね。こんな素敵な奥さんもらって。」

「まあな。」

「やだ、桃ちゃん。」

光くんは、自慢げに言い、明美さんは、赤くなった。

お似合いな夫婦だと心から思った。

私は、立ち上がると、光くんと明美さんを見比べた。

「本当におめでとう。光くん。明美さんと幸せになってね。」

最高の笑顔ができたかどうかは、あまり自信がないけれど。

透明な日々

失恋をしたからといって、人間は、死ぬわけではない。

私は、ずっと、義理の兄が好きだった。

だけど、光くんは、私以外の女性と恋をして、結婚してしまった。

私を妹として愛してくれても、恋愛の対象としては見てくれなかった。

それが、事実であり、まぎれもない真実だ。

「桃ちゃん。準備できた？」

階下でお母さんが呼んでいる。

時間のない人だから、急がなければならない。

「今いく。」

赤い革張りのスーツケースを手に持った私は、部屋の電気を消した。

最後にもう一度、振り返ると、薄暗い部屋は、ひっそりと静まり返っていた。

絵本を読んでくれた光君も彼の膝の上に乗っている私も、もういない。

＊＊＊

車に乗ると、お母さんは、書類を熱心に読んでいた。

私のお母さんは、なかなかの美人である。

整った目鼻立ちと涼やかな目元は、知的だし、艶やかな唇は、色っぽい。

お母さんは、私の実の父親が亡くなった後、雲野忠さんと結婚したのだけど、忠さんも五年前に亡くなってしまった。

忠さんは、大きな化粧品会社の社長だったので、お母さんは、彼の後を継いだ。

周りの人達に色々言われたみたいだけど、光くんのサポートもあって、今では立派な女社長だ。

1年間のほとんどを海外で過ごす人だから、あまり会うこともできない。

先月、光くんの結婚式のために一時帰国したけれど、明日のフライトでアメリカへ行ってしまう。

「お母さん、明日は、何時の飛行機？」

「13時よ。」

お母さんは、顔も上げずに返事をした。

「学校に何時までいられるの。」

「先生にご挨拶したら、すぐ行くわ。夕方、本社で会議があるの。」

「次は、いつ会えるの。」

「どうかしら。夏の新作コレクションがあるから、7月まではかなり忙しいのよ。」

書類のグラフを睨めっこするお母さんの横顔を眺めながら、こっそりため息をついた。

仕事をするお母さんは、かっこいいい・・・だけど、好きじゃない。

＊＊＊

ざわめいていた教室が、一瞬静まり返った。私に向けられる冷たい視線には、もう慣れっこだ。

「5日間も休んだと思ったら、遅刻かよ。お嬢様は、優雅でいいな。」

結婚式だってば。ハワイで挙式だったの。

「この間のテスト、２０点を取ったらしいよ。あれ、平均点８０点だったのよ。」

結構必死に勉強したのよ。

あんな難しいテストで８０点も取れる人間の方がおかしいでしょ。

「今更じゃない。どうせ、裏口入学でしょ。」

当てずっぽうで埋めたマークシートが、当たっていたみたい。

たまにあることじゃない。

いちいち、言い訳するのも面倒なので、黙って席に着いた。

何も、大変なことではない。

何も言わずに一日が終わるのを待てばいいのだ。

私の通う私立二葉大附属学院は、全国でも有数の進学校である。

高等部の進学率は、有名私立大学と国立大学の名前が、ずらりと並んでいる。

私の在籍している中等部では、早くも大学受験を意識したカリキュラムを組まれている。

ハイスピードで進む授業や優秀すぎるクラスメイトは、正直いって、

かなり負担になっている。

だけど、さすがに２０点はまずいので、次の授業の教科書を開いた。

例題の数式を読んでもちっとも解らない。

頭を捻っていると、ふいに教科書に影が差した。

顔を上げると、数人の女の子達が立っていた。

あまりご機嫌な雰囲気とは言い難い。

「雲野さんて、特進寮に入るの？」

真ん中に立っていた宮下雪絵が、問い詰めるような口調で言った。

「うん。」

そうなのだ。

光くんが結婚した今、お母さんが海外へ出張している間、私は、雲野家に一人になってしまうので、学校の寮に入ることになった。その寮というのが、また問題で、そこには、特進クラスのトップしか入れないのである。

トップどころか進学クラスでもない私が住めるのは、お母さんのゴリ押しがあったから。

「ちょっと図々しくない。特進寮は、特進クラスの子だけが入れる

のよ。」

私は、黙って下を向いた。

正面切って言われてしまうと、返事の仕様がなかった。

図々しい立場だということは、重々承知の助。

「雲野さんは、もう少し他の人のことを考えるべきだと思う。」

ぴしゃりと言い放った宮下雪絵は、周りの女の子達を引き連れて去っていった。

考えてもどうにもならないことってあると思うのだけど。

住めば、都かもしれない

「雲野さん。雲野桃さん。」

気がつくと、中年の女性が、ソファーに座った私の顔を覗きこんでいた。

「あ、ごめんなさい。えっと、」

慌てて謝ると、女性は、にっこりと笑った。

「寮母を務める飯田比佐子と申します。困ったことがあったら、何でも聞いて下さいね。とりあえず、荷物を部屋に運びましょうか。」

「お願いします。」

玄関に置いてあったスーツケースを持ちあげた私は、飯田さんの後を追った。

私の部屋は、2階の一番端だった。

ドアには、すでに私の名前が書かれたネームプレートが掛っていた。

中に入ると、ベッドと勉強机と年季の入った箪笥が置かれているだけの素っ気ない部屋だった。

部屋の奥には、先に送っておいた段ボールが、置かれていた。

「何もない部屋でしょう。前に使っていた人は、男の子だったから、鏡もない部屋なのよ。」

私の心中を察したのか、飯田さんは、ふふと笑った。

「キッチン、食堂、書斎、トイレ、バスルーム、洗濯機、乾燥機は、共同で使うことになっているわ。食事は、朝の7時と夜の7時に食堂へ来てね。お昼は、各自でとること。細かい規則は、お夕飯の後に説明するわね。荷解きを手伝った方がいいかしら。」

「ありがとうございます。でも、大丈夫です。」

「あら、そう。私は、下のキッチンにいるから、いつでも声を掛けてね。」

飯田さんが部屋を出て行った後、私は、ベッドに腰を下ろした。

泣きだしたいほどじゃないけれど、じっとりと湿った喪失感が、全身を覆っている気分だ。

だけど、感傷に浸っていては、一向に気が滅入るばかりである。

「よっし。」

典型的な掛け声を出すと、段ボールに歩み寄った。

荷物整理は、あっという間に終わってしまった。

衣服類を箪笥にしまい、机の上のラックに教科書を立てると、それで終いである。

プーさんの置き時計を見れば、夕食の時間まで1時間以上あった。
あまりに暇なので、光くんにメールを打つことにした。
スーツケースの中から光くんに買ってもらったマックのノートパソコンを取り出した。

今晩は、光くん

今頃、ハネムーンを楽しんでるかな。

引越しは、無事に完了しました。

寮母さんも優しそうな人だよ。

学校まで歩いて5分の距離は、魅了的だと思わない？

せっかくなので、一人暮らし気分を思いっきり楽しもうと思っているんだ。

光くんも明美さんと新婚生活を満喫してね。

桃より

送信ボタンを押した時、ドアをノックする音が聞こえた。
はいと返事をすると、高めの女の子の声が聞こえた。
「隣の部屋の坂野です。」
そういえば、この寮は、特進クラスの中でもトップの人だけが入れる特進寮だ。
特例の私は、別として、きっと知的な人に違いない。
緊張してきた私は、椅子から立ち上がると、ドアに向かって声を掛けた。
「ど、どうぞ。」
開いたドアの向こうには、小柄な少女が立っていた。
長い黒髪に真っ白な肌をした、なんだか人形みたいな女の子だった。
淡いピンク色のワンピースの裾から見える脚は、うっとりするほど細い。
しばらく、見惚れていると、艶やかな赤い唇が、動いた。
「私、中等部3年の坂野ゆりと申します。中等部1年の雲野桃さんですか。」
「あ、はい。」

間が抜けた返事をした私を見た坂野ゆりさんは、きゃあと歓声を上げた。

「待ちに待った女の子。桃ちゃんなんて、かわいいい名前。」

華奢な腕は、案外力強く、気がつくと、坂野ゆりさんは、私のお腹を抱きしめていた。

「ああ、柔らかい。シャンプーの豊潤な香り。すべすべのお肌。」

意味不明な言葉を呟きながら、小柄な美少女は、うっとりと私を見上げている。

「百合趣味だから、ゆりじゃないわよ。」

「は、はあ。」

ねっとりした視線を向けられると、嫌な汗が背中を伝った。

百合趣味って、レズのことだよね。

「レズビアンよりは、もう少しソフトな同性愛よ。ゆりお姉様って、よ・ん・で。」

私の脳裏に浮かんできた疑問に答えるように耳元で囁かれると、鳥肌が立った。

「あの、その。」

離れたくても、体が石のように硬直してしまって、動けない。

背伸びをした坂野さんの整った顔が近づいてくる。

「いいのよ。何も言わなくて。一つ屋根の下で生まれるのは、恋しかないわ。桃ちゃんは、美しい私のと・り・こ。」

最後の『こ』の発音が終わらない内に生温かいものが、私の唇に触れていた。

ギャース。

住めば、都かもしれない　2

衝撃的な出来事は、私にとって受け入れがい事実だったに違いない。
坂野さんにキスされた後、私の意識は、暗転した。
目を覚ますと、頭の上で誰かが言い争っていた。
一人は、坂野さんで、もう一人は知らない声だった。
「まったく、お前は。新入生相手に何してるんだよ。」
「いいじゃない。桃ちゃんだって、私の美貌に見惚れていたのよ。」
「だからって、合意なく襲っていい理由にはならないだろう。見境ない奴だな。」
「あーら。モテない男のひがみかしら。」
「誰に言ってるんだよ。」
「去年のバレンタインチョコは、私の方が、４倍多かったわよ。」
「男からも貰うなんて、卑怯だぞ。」
「愛は、卑怯なものよ。」
「よく恥ずかしげもなく、そんな台詞言えるな。」

「なんですって・・・って、あら、桃ちゃん、起きたの？」
般若のような表情から一転、坂野さんは、二人の激しい会話のキャッチボールを見守っていた私に菩薩のような笑顔を向けた。
「は、はい。えっと。」
慌てて体を起こした私は、返事をした。
なんて言えばいいのやら。
「いいのよ。私とのキスが、素敵すぎて、失神してしまったことなんて、全然気にしてないわ。むしろ、そんなに楽しんでくれたなんて、こ・う・え・い。」
頬を添えられた白い手が、妙に熱い。
後ずさりした時、坂野さんの頭にお盆が直撃した。
坂野さんは、頭を押さえて、小さく呻いた。
「もうやめろ。明らかに怖がっているだろう。」
お盆を手にしているのは、見たことない男の人だった。
大人っぽいから、多分、高等部の人だろう。
身長が、かなり高くて、１８０センチ位ある。
日焼けした肌が、健康的なスポーツマンといった感じである。

「何すんのよ。乙女の頭を叩くなんて、紳士失格ね。」

「どっかの野獣よりはましだよ。」

男の人は、とんでもないことをさらりと言うと、私に向き直った。

「高等部1年の真咲佑介だよ。よろしく、雲野さん。」

差し出された大きな手を握ると、真咲さんは、爽やかな笑みを浮かべた。

「よろしくしなくて、いいわよ。こんな馬鹿は、放っておいて、私と黄昏ランデヴーしましょう。」

坂野さんは、私の手を握っていた真咲さんの手を叩くと、懲りずに近寄ってきた。

「黄昏ランデヴーって、何だよ。それより、もう飯の時間じゃね。やっべ。俺、今日は、テーブル当番じゃね。」

私の心の中の声を代弁してくれた真咲さんは、時計を見ると、慌てたように出て行った。

「あら、残念。それじゃあ、真夜中のティータイムにしましょうね。さ、桃ちゃん。食堂まで一緒に行きましょう。」

坂野さんにひきずられるようにベッドを出た私は、そのまま一階の食堂へ連行された。

住めば、都かもしれない　3

食堂のテーブルは、８人掛けだった。

寮生は、７人だから、残る一席は、寮母の飯田さんの席だろう。

テーブルには、３人の男の人が座っていた。

奥に座っている二人は、多分、高等部の人だろう。

一人は、がっしりした体格の大柄な人で、柔道部の主将とかラグビー部のキャプテンが似合いそうだ。

一直線の太い眉が、性格も表していそうである。

その隣に座っている人は、対照的で、ほっそりとした長身の中性的な人だった。

淡い金髪と茶色い瞳が、柔らかで上品な印象を与えている。

手前の席に座っている男の子が、私の同級生だろう。

特進クラスと私のクラスは、かなり離れているので、面識はない。

学年首席君は、絵に描いたようなガリ勉らしく、ビン底眼鏡を掛けていた。

ついでにもしゃもしゃの前髪のせいで、顔がほとんど見えない。
隣に座ってから、ちょっと覗きこんでみたけれど、顔を逸らされてしまった。

「はい、注目して。こちらが、今日から入る雲野桃ちゃん。中等部の1年生よ。優しくしてあげてね。」

「よろしくお願いします。」

坂野さんの威勢のいい紹介を受けて、私は、頭を下げた。

「高等部3年の望月暁といいます。これから、よろしく。」

金髪の人は、にっこりと笑った。

「高等部2年の間宮宗一郎だ。よろしく。」

大柄の人は、イメージ通りの低音で武骨な挨拶をした。

高等部の二人が挨拶を終えても、ビン底眼鏡君は、何も言い出さない。私から挨拶した方がいいのだろうか。

「4組の雲野です。よろしく、吉田くん。」

「吉井です。」

気まずい沈黙が流れた時、大皿を持った飯田さんが、真咲さんを従えて、キッチンから出てきた。

「おまたせ。今日は、雲野さんの歓迎会だから、張り切ったわよ。」
そう言いながら、テーブルの真ん中に置かれた大皿には、色鮮やかなちらし寿司が入っていた。
穴子も乗っていて、すごく美味しそうだ。
「ありがとうございます。」
小さな声でお礼を言うと、飯田さんは、丸い顔に優しい笑顔を浮かべた。
「遠慮せず、どんどん食べろよ。海老フライもあるからな。」
真咲さんは、私の皿に海老フライを乗っけながら、言った。
「そうよ。桃ちゃん。すぐに食べないと、真咲に食べられちゃうからね。」
坂野さんの言葉を聞いた真咲さんは、顔をしかめた。
「そんなに意地汚くないぞ。」
「冷蔵庫に入ってた私のプリンを食べたのは、どこの誰だったかしら。」
「飯田さんが買っておいてくれたのと勘違いしたんだよ。大体、４つもあったじゃん」
「図々しいわね。全部、私のよ。今晩、桃ちゃんと一緒に食べよう

と思ってたのに。」

「2つにしとけよ。性格悪い上に太ったら、目も当てられないぞ。」

「あんたの口の悪さに比べたら、かわいいもんよ。」

「『かわいい』ほど、お前に似合わない単語はないな。」

「無神経もほどほどにしないと、いつか痛い目みるわよ。」

「その心配はないね。お前に出会ったことが、人生の中で、一番痛いからね。」

坂野さんは、30センチも差がある真咲さん相手に一歩も引かない。

飯田さんや他の3人は、気にも留めない様子で、食事を始めている。

「雲野さん、刻み海苔かける？」

望月さんに聞かれた私は、頷いた。

「あ、はい。でも、いいんですか。」

「真咲と坂野だったら、気にしなくていいよ。いつものことだからね。」

望月さんは、細くて長い指で私のちらし寿司の上に刻み海苔をパラパラとかけた。

透き通るような手と刻み海苔は、面白いほどミスマッチしていた。

気になっていたことを聞いておこうと思った。

「あの。」

「何かな？」

少しハスキーな声は、なんとも甘く響いた。

「望月さんて、男の人ですか。」

望月さんは、少し驚いたように目を大きく開いたけれど、すぐに優しい声で答えた。

「そうだよ。」

「美人ですね。」

素直な感想を述べると、望月さんは、くすりと笑った。

「面白いね。桃ちゃんて、呼んでいい？」

「いいですよ。」

私は、こくこくと頷いた。包み込むように優しい茶色い瞳に抵抗できる女の子なんて、いないだろう。

魅せられたまま、望月さんを見つめていた。

やばいかもと思った時、間宮さんに低い声で名前を呼ばれた。

「雲野さんは、どこか部活に入っているのか？」

「いいえ。」

「そうか。」

唸るように呟いたまま、間宮さんは、少し黙った。

それから、少し躊躇いがちに口を開いた。

「もしよければ、家庭科部に入らないか。」

「え。」

お互い戸惑った間宮さんと私の間をとりなすように、望月さんが助け舟を出した。

「間宮は、家庭科部の部長なんだよ。部員が少なくて、困っているみたい。」

望月さんの言葉を聞いた私は、かなり仰天した。

柔道部の主将みたいな間宮さんが、家庭科部の部長って・・・・。

「活動は、週3回だ。調理は、週1で、手芸は、週2で行う。」

間宮さんは、低い声で説明をしてくれた。

想像できない。

間宮さんが、巨体を丸めて、玉ねぎをみじん切りにする姿やビーズの刺繍をする姿なんて、想像できないよ。

住めば、都かもしれない　4

「うぅ。胃が、ムカムカする。」

一緒にお風呂に入ろうと誘う坂野さんの誘いを振り切って、部屋に戻った私は、ベッドの上で唸っていた。

夕食で勧められるがままに調子に乗って食べすぎたせいか、どうも調子が悪くなった。

ひと眠りすれば、治まるかと思っていたけれど、甘かった。

胃が痛くて眠れない。

お茶でも飲んだら、落ち着くかもしれないので、キッチンへ行くことにした。

キッチンには、明かりがついていた。

誰かいるのだろうか。

坂野さんだったら、どうしようと思いながら、恐る恐る覗くと、ジャージの後ろ姿が見えた。

夕食の時にはいなかった中2の人だろう。

だけど、また男の人。

この寮って、男ばかりだ。

「こ、今晩は。」

振り返った相手は、私を少し訝しげに見つめた。

私より少し背が高くて、茶色っぽいくせ毛と半月形の瞳が、猫みたい。

「えっと、誰だっけ。」

少し高めの声は、寝起きなのか、かすれていた。

「今日からお世話になります、中等部1年の雲野桃です。」

しばらく沈黙があったが、その人は、ああと呟いた。

「新しい人か。自分は、野村あさ」

キッチンタイマーが、ピピピと鳴った。

野村さんは、くるりと向きを変えると、流し台の上にあったカップヌードルに手を伸ばした。

フタを剥がすと、立ったまま、麺をすすり始めた。

「あの、ちらし寿司が、冷蔵庫に入ってますよ。」

「もう食べた。こっちは、味噌汁代わり。」

野村さんは、それだけ言うと、また食べ出した。

なんだか、大学生の光くんを思い出した。

サッカーのサークルに入っていた光くんは、夜遅くに帰ってきて、夕飯だけじゃ足りないからと、カップめんを食べていた。

夜中のキッチンで、よくカップめんを食べているジャージ姿の光くんを見かけた。

見ていると、光くんは、決まって言うんだ。

「一口食べる？」

問いかけてくる野村さんが、一瞬、光くんと重なった。

やっぱり、まだまだ傷は癒えていないらしい。

私は、苦笑気味に笑うと、首を横に振った。

「いいえ、いいです。ちょっと、胃の調子が悪くて。お茶でも飲もうかと思って。」

すると、野村さんは、カップを置いた。

「待ってて。胃薬あげるから。」

「え、大丈夫ですよ。」

野村さんは、ふわっと微笑んだ。

猫の微笑って、こんな感じなのかなと思うような悪戯っぽい笑顔だった。

待っててと、もう一度言うと、野村さんは、キッチンを出ていった。

すぐに戻ってきた野村さんは、胃薬の箱を私の手に乗せた。

「結構強い薬だ。初めてだったら、1粒にしておいて方がいいよ。」

お礼を言うと、野村さんは、再び猫の微笑を浮かべた。

「おやすみ。」

その声は、するりと私の胸に入ってきた。

私のドクンと大きな音がした。

＊＊＊

「もーもちゃん。朝ですよ。お・き・て。」

頭の上で響くモーニングコールを聞いて、昨夜、ドアの鍵を掛け忘

れたことを思い出した。

でも、だからって、無断で入ってくるって、どうよ。

目を開けると、大きな黒い瞳が、私を覗きこんでいた。

カールした睫毛は、マッチ棒が乗りそうなほど長い。

「おはようございます。坂野さん。」

真っ白な寝巻姿の坂野さんが、眩しい。

大体、今の私にとって、純白は、鬼門なのだ。

「やだ、桃ちゃんたら。ゆりお姉様って、呼んでと言ったでしょう。」

「そうでしたか。」

「やだ、桃ちゃんのわ・す・れ・ん・ぼ・う・さ・ん。」

坂野さんは、ちっともメゲナイ。

「あの、シャワー浴びてくるので、ちょっといいですか。」

なんとか、ベッドから抜け出したけれど、坂野さんは、私の腰にしがみついてくる。

「私も一緒に入ろうか・な。」

「結構です。」

ごねる坂野さんを残して、階段を駆け降りた。

一階のバスルームとトイレは、男女にそれぞれ一つずつある。

坂野さんは、二階にいるので、女子用バスルームは、当然のことながら、誰も使っていない。

内側から鍵さえかけてしまえば、こっちのものである。

勢いよくドアを開けた途端、もわっとした蒸気に視界を遮られた。

えっと思って後ずさった時には、もう後の祭りである。

立ち上る蒸気の中から現れた背の高い人物を見た時、私は、顎が外れるほど驚いた。

「あれ、桃。お前もシャワー？」

浴室から出てきた野村さんは、私を見て、猫の微笑を浮かべた。

石化している私をよそに野村さんは、平然とブラジャーをつけている。

そう、ブラジャーを・・・・・え？

住めば、都かもしれない　5

朝食の手伝いは、女子全員が行うものとする－特進寮規則第８条－

ゆえに特進寮のキッチンは、にぎやかである。

「朝子ったら、また夜中にカップラーメン食べたでしょう。お肌に悪いわよ。」

ゴミ箱の中のカップヌードルのカップを目ざとく見つけた坂野さんは、カップを手に取ると、野村さんの鼻づらに突きつけた。

「ちらし寿司だけじゃ、足りなかったものですから。」

背の高い野村さんは、しゅんとしながら、小柄な坂野さんの前で頭をたれた。

傍から見ると、妹が兄を叱っているように見える。

「あれじゃあ、少なかったかしら。バレー部の練習は、大変そうだものね。今日からは、倍の量にしておくわね。」

飯田さんは、二人と取り成すように優しく言った。

「ありがとうございます。」

「あら、やだ。いいっこなしよ。それより、今日は、朝練はないのね。」

「顧問の村田先生が、休みなんです。」

「あらあ、珍しいわね。」

「ええ。」

野村さんは、猫の微笑を惜しげもなく、飯田さんに見せた。

飯田さんの隣でレタスをちぎっていた私の目にも否応なしに飛びん込んできた。

ドクンと音がした。

きっと、寝不足のせいだと自分に言い聞かせた。

大体、昨日は、遅くまで眠れなかった。

あまりに眠れないから、光くんにメールを打つことにした。

今晩は、光くん

私は、今すごく変な気分です。

正直にいいます。

さっき送ったメールは、本心は、半分くらい、後は、妹としての愛情から嘘です。

光くんが結婚した後、ずっと苦しくてたまらなかった。

物凄く暗い気分で、引越ししてきたのだけど、今はなんだか、暗いというより驚き疲れています。

私は、今日、ファーストキスをしたの。

相手は、なんと女の人（私には、そういう趣味はないよ。）

坂野さんという人で、お人形みたいな見た目だけど、中身は、獰猛。

坂野さんの天敵は、真咲さん。

二人は、いつも喧嘩しているらしい。

夕食の時に会ったのは、男性なのにすごく綺麗な望月さんとごつい見た目なのに家庭科部の部長をしている間宮さんとビン底眼鏡をかけた同級生の吉井くん。

高等部の二人は、優しいけれど、吉井くんは、少しとっつきにくい感じ。

最後に会ったのは、野村さん。

夜中にキッチンでカップめんを食べていた。

猫みたいに笑うの。

すごくかわいい。

胸が大きな音を立てました。

光くんの幸せを心から願ってあげることができる日は、きっとすぐそこです！

真夜中の桃

飯田さんと談笑する野村さんを横目で眺めながら、あのメールを送らなくて、よかったと心底思った。

やれやれ。

住めば、都かもしれない　6

「なんで、桃は、特進寮に入れたの？中等部1年て、吉井が首席だろ。」

野村さんは、わかめの味噌汁に白米を投入した猫まんまを豪快にかきこんだ後、核心を突くような質問をしてきた。

多分、寮の人全員が、疑問に思っていたことだと思う。

「私の家って、お金持ちなんです。」

少し箸を止めて考えた後、野村さんは、なるほどと呟いた。

「ちょっと、朝子。無神経なこと言わないの。」

「別に気にしません。実際、ずるいですから。」

とがめるような口調の坂野さんを制した私は、いつものように平静を装った声で言った。

「でも、」

「本当に平気です。」

はっきり言い切った時、沢庵をかじる音が、ポリっと響いた。

見ると、望月さんが、沢庵を咀嚼していた。

背筋をすっと伸ばして、沢庵を口に運ぶ金髪の男は、空気を全く読んでいないが、妙に爽やかである。

沢庵を食べ終えた望月さんは、おもむろに口を開いた。

「平気とは、少し違うんじゃないかな。」

「え？」

望月さんの茶色い瞳は、私を真っ直ぐに見据えていた。

柔らかい視線のはずなのに目を逸らすことができない。

動揺した私に望月さんは、にこりと笑いかけた。

「野村さんは、正直な子で、坂野さんは、人の心配をできる子だよ。ここに慣れるといい。君にとって、とても優しい場所になるはずだから。」

「俺は、家庭的な子だ。」

いきなり、間宮さんが、自己申告した。

「確かに宗一郎の沢庵は、最高だね。」

「間宮家秘伝ですから。」

望月さんと間宮さんは、平然と会話を続けている。

「やっぱり、料理上手は、はずせないよな。おい、坂野。味噌汁、しょっぱいぞ。」

「うるさいわね。あんたの分だけ、塩分濃度上げたのよ。」

「ホント、いい性格しているな。」

真咲さんと坂野さんは、朝から仲良く喧嘩を始めた。

「気持ちいい朝ね。」

飯田さんが、ご機嫌な調子で呟いた。

「はい。とても。」

野村さんが、相槌を打つと、お茶を啜った。

ここに慣れる日なんて、来るのだろうか。

＊＊＊

ビン底眼鏡を掛けた少年は、朝食に姿を見せなかった。

吉井くんを見かけたのは、お昼休みだった。

４時限が、美術だったので、後片付けをしていたら、すっかり遅くなってしまった。

私は、チョコチップメロンパンが売り切れていないことを願いながら、急ぎ足で売店に向かっていた。

パンを買っておいてくれる友人さえいない。

我ながら、淋しい人生である。

2号館と3号館をつなぐ渡り廊下を通った時、ふと窓の外に見覚えのある後ろ姿が目に入った。

木の下に立っているのは、くしゃくしゃ頭の吉井くんだった。

どうやら、携帯電話で誰かと話しているようだった。

うちの学校は、建前上は、校内に携帯電話を持ち込むことは禁止されているけれど、ほとんど守っている人はいない。

でも、真面目そうな吉井くんが、堂々と携帯電話を使っているのは、意外な気がした。

特進寮の住人は、意外な面を持っている人が多い。

案外、吉井くんもパソコンオタクとか携帯依存症のあぶない人かもしれない。

まあ、かかわることもないだろう。

・・・・

私の場合、楽観的な予感は、往々にして外れる。

住めば、都かもしれない　7

売店に行くためには、学食のラウンジを通らなければならない。

大勢の人が学年もめちゃくちゃに入り乱れる空間に入るのは、疲れる。

運動部の男子生徒達が、同じユニフォーム同士でかたまって、大きな笑い声を立てている様子を見るのは、あまり好きではない。

サッカー仲間と一緒にいる時の光くんもあまり好きではなかった。

知らない人と笑い合う光くんは、遠くにいるような感じがした。

もちろん、どんなにたくさんの人がラウンジにいたって、雲野桃を気にする人なんかいない。

空気のような私は、ラーメンの食券を持った人達が並ぶ長蛇の列を横目にすいすいと人波を抜けていくことができる・・・はずだった。

「桃ちゃん！」

ソプラノの声が、私を呼びとめた。

一瞬私の周囲が静かになって、痛いほどの視線が突き刺さった。

私と私の名前を呼んだ人物に。

坂野さんは、そんな視線を意に介さず、私に近づいてきた。
腰まで伸びた黒髪が、さらさらと揺れた。
私の目の前まで来た坂野さんは、つま先立ちになって、細くて真っ白な手を私の頬に伸ばした。
既視感を覚えた私は、一歩引いた。
泣いているわけでもないのにしっとりと濡れた黒い瞳が、私を映していた。
「私のウサギちゃん。そんなに急いでどこへ行くの？」
馬鹿馬鹿しい。
雰囲気にのまれてはいけない。
こんな綺麗で危険な人とは、距離を取っておかないと絶対に痛い目をみる。
「売店ですよ。」
「何を買いにいくの？」
「チョコチップメロンパンです。」
「そう。チョコチップメロンパン。」

ため息と共に洩れる『チョコチップメロンパン』は、私の発した単語と違う艶っぽい響きを持っていた。

「どうして、チョコチップメロンパンなのかしら。」

「好物だからです。」

坂野さんは、口元に薄ら微笑を浮かべた。

「私も好物なのよ。」

「はあ。」

坂野さんは、くるりと私に背を向けると、大きな声でもう一度言った。

「チョコチップメロンパンは、私の好物よ。」

急に数人の生徒が、売店へ入っていったと思うと、すぐに坂野さんのそばに走ってきた。

「売り切れでした。」

一番先にやって来た男子生徒が、息を切らしながら、言った。

でも、坂野さんは、その人を一瞥しただけで、もう一度同じ言葉を繰り返した。

「チョコチップメロンパンは、私の好物よ。」

すると、また数人の生徒が走り寄ってきた。
手には、チョコチップメロンパンを持っている。
ショートカットの女子生徒は、顔を赤らめながら、チョコチップメロンパンを両手で坂野さんに差し出した。
「まだ、封を開けていません。よかったら、私のを食べてください。」
坂野さんは、差し出されたチョコチップメロンパンを極上の笑顔で受け取った。
「ありがとう。お礼に雪村さんの好きなものをあげるわ。なんでも言って。」
「あ、じゃあ。明日のお昼ご一緒してもいいですか。」
「もちろん。雪村さんの好きなメニューをごちそうするわ。デザートもつけてね。」
雪村さんというらしい女子生徒は、黄色い声を上げると、後ろに立っていた友人に抱きついた。
振り向いた坂野さんは、絶句している私の手にチョコチップメロンパンを乗せた。
「あの、こんなことして大丈夫なんですか。」
坂野さんは、にっこり笑う。

「私は、桃ちゃんが好き。桃ちゃんは、チョコチップメロンパンが好き。チョコチップメロンパンを持っていた雪村さんは、私が好き。つまり、桃ちゃんは、チョコチップメロンパンを食べていいのよ。」

お礼を言って受け取るのは、簡単だった。

だけど、なんだか、無性に腹立たしかった。

こんな風に扱われるのは、きらい。

「使い回しの好きは、いらないです。雪村さんのチョコチップメロンパンは、坂野さんが食べるべきです。」

坂野さんは、驚いたように私を見た。

周りの人も。

やってしまったみたい。

黙っていれば、いいのに。

あーあ。

住めば、都かもしれない　8

学食ラウンジを脱兎の如く飛び出した私は、教室へ向かった。

結局、チョコチップメロンパンどころか、食べる物さえ買えなかった。

お腹が空いてるけど、今更、学食へ戻る勇気なんてない。

というか、1週間くらい、学食へ行けそうもない。脱力したまま、ふらふらと歩いていると、廊下の先からいい匂いが漂ってきた。

空腹のせいか、引き寄せられるように匂いを追うと、調理室に行き着いた。

いきなり、お腹が鳴った。

急いで立ち去ろうとした時、ドアが開いた。

出てきた大きな体の持ち主は、私を見下ろすと、腕を掴んで中に引き入れた。

「腕、痛いです。」

「ああ、悪い。そこに座れ。」

間宮さんは、私の腕を離すと、近くの椅子を指し示した。

黄色いエプロンをつけた間宮さんは、炊飯器から茶碗にご飯をよそって、私の前に置いた。

「あの、」

「キンメダイの煮つけときんぴらもあるぞ。味噌汁は、ちょっと待ってろ。温めてやるから。」

あっという間に用意された和風定食を前にごくりと喉が鳴った。

せっかくだから、いただこう・・・ん、んん。

「美味しい。美味しいです。」

間宮さんが、武骨な手で作った料理は、どれも驚くほど美味しかった。

甘辛い煮つけと少し硬めのご飯は、相性抜群だったし、シャキシャキと歯ごたえのいいきんぴらごぼうは、ふりかけてある白胡麻まで質の良い物を選んでいるようだった。

一品一品の感想を言うと、間宮さんは、口元をほころばせた。

「家庭科部に入れば、作り方を教えてやるぞ。」

「これは、勧誘ですか。」

「そうともいうな。」

そんなことを言うわりに間宮さんは、それ以上何も言いわず、私の前にお味噌汁の入ったお椀を置いた。

間宮さんは、とても静かだった。

外で降りだした雨の音だけが、響く。

「さっき、坂野さんに失礼なことを言ってしまいました。」

美味しい食事のせいか、雨のせいか、私は、間宮さんに学食で起きたことを話してしまった。

話し終わった後、間宮さんは、どんぐりみたいな目をぎょろりと動かした。

体格は威圧感あるくせに仕草は、動物みたいなかわいらしさがある。

「雲野は、潔癖だな。」

「きれい好きな方ではないんですけど。」

「洗い物は、手伝ってもらうぞ。」

その返事を聞いて、安心した。

間宮さんは、私の中を覗こうとしない。

「もちろんです。ごちそうさまでした。」

投げられたスポンジをキャッチして、微笑んでみせた。

間宮さんの驚いた顔は、フクロウに似ていた。

＊＊＊

ロッカーに入れておいたジャージが無くなったことに気がついたのは、６時限が始まる前だった。

どうせ、昼休みのことが原因だろう。

しかし、窃盗は、犯罪である。

大体、こんなことしたって、自分が後味悪いだけではないか。

おそらく、ジャージは、ゴミ箱にでも捨ててあるのだろう。

見つけることができても、汚いから、使いたくない。

新しいジャージを注文しなければ。別に大したことじゃない。

どうせ、お金なんて、腐るほどあるのだから、何十着も買ってもらえばいい。

なんてことないと自分に言い聞かせた。

でも、なんだか胸が苦しくなった。

きっと、間宮さんと話して、気が抜けていたのだろう。

迂闊だったと思いつつ、胸がひりひりと痛むのを感じた。

誰かに悪意を向けられるのは、苦しい。

悲しい。

光くんに会いたい。

うえーん。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0069i/

幸福のエトセトラ

2010年10月12日02時27分発行